

セルフライナーノーツ「yes, please.」

1. yes, please

僕が19歳だった2003年8月8日、僕の父は家の近くの急な坂で深夜1時、自転車から転げ落ちて頭を打った。僕は偶然散歩の途中、倒れてる血だらけの父を見つけた。8月12日の朝、父は他界した。

父の葬式や全てのことが一通り終わった9月の真夜中、僕は事故の現場で、父が事故にあった時倒れていたのと同じ格好で、道路の真ん中に寝そべて夜空を見ていた。

その時、少しずつ探るように口ずさみながら、この曲は生まれた。

yes, please っていう言葉は僕の体に怖いくらい馴染んでいた。よく映画で何となく耳にするこの台詞を僕は、その夜繰り返し呟いた。父の死を、この世界を、どうにかして受け入れようと思った。

他に you don' t cry っていう題名の曲がある。僕が高校生の頃に書いた曲で父のことが歌詞に書いてあるから、生前、父は「僕の曲だ」と喜んでいて。教会の葬式で、僕はこの曲を最後に皆に聴いてもらいながら、父を送った。最後の I don' t cry という繰り返しは、そんな父に僕も泣かない、と約束したつもり。

2. そこはヘヴン

僕は歩きながら曲を作ることが多いから、これもまたそうなんだけれども。家の近くにぼかぼか広場という公園があって、散歩しながら立ち寄ってコーヒーを飲んでいるときに、これは何か言いたいな、という気持ちになってきた。その日は風も、星も、土も、月もみんな一つになっていて。だからその時の僕の状況とその夜の感じが、この曲には殆どそのまま詰まっている。何もうまくいっていない。けども何もかもがうまくいきそうな、心優しい夜だった。

バンドでアレンジをやっていく内に長い後奏を付け加えたくなった。何かが足りないように思えた。それは決定的なものだった。手塚治虫の「火の鳥」第二章、「未来編」に描かれていたような、壮大な雰囲気があるように思えた。

激しくもなく、優しく広がるというだけでもなく、当たり前にならなくて、変化していくことを一番に心がけていた。無理矢理盛り上がることも嫌だったし、インパクトのないことも嫌だった。

テレビジョンの「マーキームーン」はそれをやってのけている素晴らしい曲のように思う。夜更けの一人の状態から、すごく遠くまで、心の中は広がって行って、また同じ場所に何事もないように帰ってくる。それはまたとない、音による、意識の旅行なのだ。

後奏最後のギターの連続するフレーズは、バレエのジャンプとターンのリズムからヒントを得た。伸びやかにジャンプを二回決めてターン、ジャンプを決めて、ターン。

3. 星になりたい

この曲は高校生の頃、僕が「シューゲイザー」という音楽分野に心を燃やしていた頃。もう毎日起きるのもだるくてだるくて…。と、そんな頃…。

個人的にはギターの壁を作って、ひたすら静かな声で「な～ぜ～死んでしまう～の～」って歌えたらいいなあ、と思っていたけど、音源の演奏は激しいものになっている。僕の歌も激しくなっている。僕の初め思ってたところから考えてみると、なんのこっちゃ、である。その辺がやっぱバンドなんだなあ、と思う。

何人かで、一つの作品を作る。それ以降、僕はそのことについてずっと考えている。僕がこれまでずっと、つかず離れず避けてきた、バンドにおいての自分の主導権、といったことから、自分の音楽をやることにおいて、初めに自分の中で踏まえておかなければいけない、自己確信といったところまで。僕は細かく考えるようになった。

昔はスタジオに入る瞬間から、メンバー全員が、僕の顔色ばかり伺っていたという時期もあったようだ…。僕の態度は、バンド初期、コロコロ変わった。メンバーからしてみれば、僕の状態は大抵、落ち込んだ暗い目をして自暴自棄になっているか、借りてきた猫のように静か、…全てを諦めているか、すこぶる上機嫌で、子供みたいに騒ぎまくって、面倒くさいことになっているかの三択問題だった。いつもそんな僕のフォローをしてくれていた大泉真路には、深い感謝をしなければならぬ。

歌詞もコロコロと変わった。何度も書き直した。毎日毎日僕はこの曲の歌詞ばかり疑って過ごしていたと思う。昔はwhy?って曲だったけど、hitomi が同じタイトルの曲を出したとき、その題名はやめた。

4. I can't

ラブソングを作りたいかった。でも一向に彼女はできなかったから、そんなバラードはできそうにもなかった。大学一年の頃、付き合うかどうか、何とも微妙な雰囲気になった女の子がいた。まあ、初めての交際というものに怯えて、なかなか怖くて付き合えなかったという、よくある話なのだ。

でもそれから何となくラブソングが作れそうな雰囲気を感じ始めていた。「好き」とか「こんなに愛している」とかじゃなく、「愛していない」という反対の言葉を使って、相手を好きな気持ちを

どれだけ表現できるだろうか、ということをよく考えていた。そうして、サビが初めにできた。「背反性のあるものから何かを語る」ということに、僕は今も昔も、変わることなく強く惹かれているのだと思う。そういうことでしか、僕は上手く物事を進めることができない。

その後、僕はその女の子と一年越しに付き合うことになって、そして別れて、大学4年生の頃にようやく今の形まで辿り着いた。

この体験から、僕は自分の曲というものは、心情風景の中で見えてくる感情、ある瞬間を自分がどう受け止めていたのか、とかそういうものを大切にしているんだな、と自覚し始める。

僕は写真も撮れなきゃ、絵も描けない。そういう美しさとか捉えておきたいものを、その場でしっかり捕まえることが僕は苦手なようだ。そういう瞬発力がきつくないのだと思う。

でも僕はとにかく、写真みたいにそこにあつた何かを残しておきたいという気持ちがある。そういう曲を書けたらいいなと思っている。

5. スローモーション

ただただ、救いのない悲しい歌に聴こえるかもしれない。でもサウンドを織り交ぜていく中で、悲しみとか諦めとか喪失感とかそういったものよりも、もっと透きとおったものに仕上げられたら、っていうことを考えていた。その作業は、僕の作る曲全般に言えることかもしれない。

音楽を聴きながら、ただただ、救いようもなく悲しいけど、ビートが続いていて、それに身を委ねている。その瞬間の僕は、何となく透きとおっている。僕は何度も音楽にそんな体験をさせてもらっていた。音楽や映画や小説に救われるというとき、大体において僕は自分が透きとおっているように感じる。

これは脳死状態の父と部屋で二人きりで、僕はモノもろくに口にできず、付き添っている中で疲れきってしまった。意識が朦朧としている中で聞こえていた、人工呼吸器の音、心電図の音、父の心臓の音。

前半のドラムハイハットとかキック、キーボードはそういう病室の中の音を、テーマにした。僕はその部屋から父を連れて、ずっと旅に出ていた。色んなことを思い返していた。

曲自体は、その部屋の中に僕は今でも足を踏み入れている、ということを書いた。

6. see you

一発で、みんながノレるような曲が作りたいと思っていた。ただ、僕たちにはそれが途方もなく難しかった。散々苦勞して、やっとのことで録音したのを覚えている。

アルバムの録音が終わった2005年12月に小さい頃からの友達と京都に行った。その新幹線の中でこの曲をその友達に聴かせたら、その旅行の間何度かsee you聴かしてよ、と言われたことが最高に嬉しかった。

曲自体は、友達や家族と楽しい時間を過ごしているのに、いつかは皆いなくなるのかなとか、素晴らしい場所に行っても、もうこの先同じようにここに来ることは二度とないだろうな、とか漠然と考えてしまうようなことを書いた。みんなそうやって、場所から、人から、離ればなれになっていく。

京都。楽しいその旅行の終わりは、二人してお金がなくなって、夜行バスの一番安いチケットを四条河原町の金券ショップで3700円で買って帰ることになった。その夜、バスの中で眠れずに安物ウイスキー二口ですっかり酔っ払った僕は、片手にボトルを抱きながら、冷たい雫の張った窓ガラスに頬つべたをくっつけて、一人で何度も何度もこの曲を聴いていた。

明け方になって、ふらつきながら走り続ける何台もの長距離トラックを見て、「ああ、僕の知らない世界が今日も、こんなにも動いているんだ。そして、僕はこの小さい日本という国の中で、こうやって今日も、確かに息をしてるんだなあ」とか考えていた。酔っ払っていたせいか、その事実が何とも不思議で難しいことのように、頭に繰り返し響いていたのを覚えている。

曲の終わりがフェードアウトというのは、こういった酔っ払いのリピート再生に最適だ。

7. よりよい暮らし

ラップでもなく語りでもない、独り言のような、小さなアジェーション。

ニュースとかのことを考えながら、ギターを弾いて作った。

僕自体は、毎日ニュースを気にして一喜一憂するようなタイプではない。嫌だねえ、最近は何騒で、とか友達と話すわけでもない。だからといって関係ないよ、僕は、とも思っていない。

でも、自信がない。自分の考えてることを、ちょっとでもハッキリ言おうものなら、黙殺されるような雰囲気が周囲にはあると思う。

何事に対しても「よく分からないけど、嫌だねえ」と言っていれば、良いみたいだ。批判することだけが、受け入れられていく。政治討論の特番だって危ない、終わりだ、危機だ、日本は取り残されるみっともない国だ、来る日も来る日もそんなことばかり言ってる。ブラウン管の中の世界。そ

して、目の前にある現実の世界。

政治だけでなく、報道に対して、ただ麻痺していただの自分が今ここにいる。悲惨な事件を「悲惨な事件だな」としか思えない自分がある。他に言葉が出てこない。テレビを見ていると、僕の頭の中の言葉はどんどん消されていくみたいだ。それは何だか、とても気持ちが悪い。

そういう時は誰かと話したくなる。目の前にいてくれる誰かが必要なのだ。そして僕はそういうことを大切にしたいと思う。

8. 心の中で

この曲は父の死後、田舎の広島からやってきたおばさんが僕を励ます言葉から、出来あがった。歌の半分は、その前に霊安室で父との最後の夜、寝袋で僕だけ一人泊まったときに生まれた。霊安室は夏なのに冷え切っていて、とても寒かった。

次の日、僕は初めて会う、そのおばさんの腕に抱きしめられていた。僕は初めて会うそのおばさんに、沢山弱気で暗いことを言っていた。

おばさんは、親との絆ってものは深まるばかりだ、あなたも親になりなさい、親になったらあなたのお父さん、またあなたに色んなこと教えてくれるわよ、とかそんなことを僕に言っていた。

それから何度となく僕は「深まるばかりだ、深まるばかりだ」と口に出して自分に言い聞かせるようになった。

何が深まるのかなんて、僕には分からなかった。

ただ、心の中で深まるばかりだ。そういうものがきつとあるのだ。そう思うしか、僕にはできなかつた。

2006年 3月 オガワアキラ